



化学遺産の第8回認定 4

認定化学遺産 第042号

近代化粧品工業を築いた 明治の企業家たち

田島慶三 Keizo TAJIMA

従来の日本化学工業史は基礎化学品や肥料、化学繊維、合成染料の歴史が中心であり、化粧品、マッチなど庶民の生活に密着した消費財化学製品の歴史は軽視されてきた。しかし、日本の近代化学工業の開始早々から多くの民間企業家が消費財化学製品の国産化に挑戦してきた。化粧品について明治の企業家たちの業績と化学遺産を紹介する。

はじめに

化粧品の範囲をどのように捉えるかは定まっていない。石けん技術から油脂化学、界面活性剤化学、コロイド化学が発展し、これが現代の化粧品技術の重要な柱となっていること、化粧品業界において医薬品・医療機器法の影響力が大きいことから、その対象となっている『化粧品』『歯みがき』『浴用・化粧石けん』を本稿では一括して化粧品の範囲とする。

近代化粧品工業の発祥と発展^{1~4)}

化粧の歴史は非常に古いが、化粧品製造業・販売業は17世紀末の元禄時代から発展した。扱われた商品は化粧用紅(原料・紅花など)、白粉(塩化第一水銀、塩基性炭酸鉛)、髪用香油、化粧水などであった。お歯黒水、洗顔用ぬか袋は自家製であった。

明治政府は様々な面で西洋化を進めたが、髪型、化粧もその例外ではなかった。1870年には華族に対してお歯黒、眉掃きが禁止され、翌年には太政官布告として断髪令が発せられた。しかし、そのような変化が国民全体に急速に広まったわけではなかった。庶民の文化・慣習に直接関わる服装、髪型、化粧などの西洋化

たじま・けいぞう

日本化学会フェロー・日本化学会化学遺産委員会委員

〔経歴〕1972年東京大学工学部合成化学科卒業。74年同大学院工学系研究科修士課程修了。同年通商産業省入省。87年化学会社に転職。2008年定年退職後は、化学産業研究者としてフリーに活動中。15年度国立科学博物館産業技術史資料情報センター主任調査員、17年4月から東京大学工学部非常勤講師。〔趣味〕ラグビー観戦、園芸、山歩き。



表1 明治初期の近代化粧品工業

西暦年	製造・販売者	商品
1873	堤石鹼製造所	石けん(化粧石けんは翌年)
1876	鳴春舎	石けん
1878	平尾賛平商店	化粧水「小町水」
1878	山崎塊一	無鉛白粉「花の宴」
1879	茂木春太・重次郎	無鉛白粉原料の亜鉛華製薬特許
1885	桃谷順天館	化粧水「にきびとり美顔水」

が進むには相当な時間が必要であった。特に女性の服装、化粧などの変化は、女性の社会進出と並行して進んだために大変に時間がかかった。

それでも西洋から導入された化学知識を生かして舶来化粧品をまねた新しい国産化粧品が明治初期から徐々に製造されるようになった。その代表的な例を表1に掲げる。

明治30年代には、それまで日本になかった化粧品、化粧法、美容技術が西洋から導入され、新聞や女性誌で盛んに紹介されるようになった。近代化粧品工業は明治中期ようやく発展期を迎えた。

「平尾賛平商店50年史」⁵⁾には明治40年代の化粧品業界の覇者として「白粉の御園」「歯みがきのライオン」「化粧水のレート」「洗粉のクラブ」が挙げられており、化粧品工業は明治末から大正期に本格的に花開いた。

近代化粧品工業を築いた明治の企業家たち

従来の日本化学工業史では、基礎化学品、化学肥料、化学繊維を重視し、消費財化学製品は軽視される傾向があり、明治期の化粧品工業はほとんど見落とされて

表2 明治中期以後の近代化粧品工業

西暦年	製造・販売者	商品
1888	資生堂	固形練歯みがき「福原衛生歯磨石鹸」
1890	長瀬商店	化粧石けん「花王石鹸」
1893	小林富次郎商店	「高評石鹸」「軟石鹸」「絹練石鹸」
1896	小林富次郎商店	粉歯みがき「獅子印ライオン歯磨」
1897	資生堂	化粧水「オイデルミン」
1900	長谷部伸彦(胡蝶園)	無鉛白粉「御園白粉」
1906	中山太陽堂	洗顔料「クラブ洗粉」
1906	資生堂	無鉛色つき白粉「かへで」「はな」
1915	資生堂	養毛髪髮剤「フローリン」

きた。しかし、この時代にも表1、表2に示すように、多くの企業家が近代化粧品工業に挑戦しており、日本化学工業史の見直しが必要である。

堤磯右衛門⁶⁾(1833~91年)は、日本における石けん製造の創始者と言われる。1873年に横浜に堤石鹸製造所を創設した。フランス人技師ボイルから石けんの効用と製造法の概略を教わり、丸善創業者・早矢仕^{はやしゆうてき}有的の技術的援助も受け、石けん製造の工業化に成功した。石けん製造技術は、堤石鹸製造所出身の村田文助を通じて1876年創業の東京向島の鳴春舎に伝わり、そこから、さらにライオン(小林富次郎)、花王(村田亀太郎)に伝わっていった。堤石鹸製造所は1877年に第1回内国勸業博覧会で表彰を受け、製品を輸出するまでに至った。しかし1881年の松方デフレによって大打撃を受け、1893年に廃業した。



福原有信(1848~1924年)は、若くして医学、西洋薬学を修め、維新後は大病院(後の大学東校)中司薬や海軍病院薬局長となった。23歳で官を辞し1872年に民間初の洋風調剤薬局・資生堂を創業した。1888年に日本初の固形石鹸状の練歯みがき「福原衛生歯磨石鹸」、1897年に化粧水「オイデルミン」、1906年に色つき白粉「かへで」「はな」など時代に先駆けた化粧品を発売した。福原の活動分野は、1892年に医薬品「脚気丸」を発売し、1902年には現在の資生堂パーラーの前身となる「ソーダファウンテン」を開設、さらに東京薬舗会、我が国初の近代医薬品会



社・大日本製薬会社、生命保険の帝国生命保険(現在の朝日生命保険)の創設に関わり、その運営の中心人物として活躍するなど幅広い。1916年には三男の福原信三に化粧品部を独立させて、今日の(株)資生堂の基礎を築いた。

花王(株)の創業者長瀬富郎⁷⁾(1863~1911年)は1887年に長瀬商店を開き、石けんと文房具の卸売りを始めた。石けんは庶民の手が届く人気商品になっていたが、輸入高級品は高価、国産品は粗悪品が多いという状況を長瀬は憂え、高級洗顔石けんの製造を決意した。鳴春舎から独立したばかりの村田亀太郎とともに製造に着手し、1890年に成功した。関東と関西に特約店を置く販路展開も当たり、「花王石鹸」は全国的な商品となった。1902年には原料の仕込みから包装までの一貫生産工場が完成し、事業は内外に飛躍的に伸びた。



ライオン(株)の創業者小林富次郎⁷⁾(1853~1910年)は、鳴春舎で働いた後、目を病み療養生活を送った。1891年に再起し、石けんとマッチ原料の取次店として小林富次郎商店を開設した。1893年に石けんの製造販売に乗り出し、「高評石鹸」「軟石鹸」「絹練石鹸」を発売した。1896年には歯みがき粉事業に参入し、「獅子印ライオン歯磨」を発売した。幟を立てて楽隊が行進曲で練り歩くなどの広告宣伝政策が当たり、歯みがきのトップ企業に成長した。



中山太一(1881~1956年)は、1903年に神戸に中山太陽堂を開き、洋品雑貨と化粧品の卸売りを始めた。3年後に製造販売に入り、1906年に発売した「クラブ洗粉」は驚異的な人気を博した。続いて白粉、歯みがき、クリームなど化粧品事業を拡大した。英国人技師の招聘、化学研究所や近代的化粧品工場の設立、自動車や飛行機を使った斬新な広告などで急速に業容を拡大させた。



このほかにも明治から昭和前期まで化粧品のトップメーカーであった平尾賛平商店(岳陽堂、後のレート)を1878年に創業した平尾賛平、鳴春舎(1876年創業)の堀江小十郎、桃谷順天館(1885年創業)の桃谷政次

郎，胡蝶園（後の伊東胡蝶園，パビリオ，1904年創業）の長谷部仲彦，伊東栄など明治の化粧品工業には多くの先人がいる。



初代平尾賛平⁵⁾

2代平尾賛平⁵⁾

堀江小十郎⁸⁾

認定化学遺産第 042 号 「近代化粧品工業の発祥を示す資料」

明治期には多くの化粧品会社が生まれた。しかし，化粧品会社の栄枯盛衰は激しく，貴重な資料の多くが散逸し，また容器等が残っていても年代不明になった。その中で，社内記録や容器ラベルなどから明確に年代がわかる資料であって，しかも化粧品工業史上，重要な資料を化学遺産に認定した。

堤石鹸関係資料は横浜開港資料館に保存されている。同資料館に寄託されている堤家文書（総点数 3073 点）の中に 1873 年から 1886 年頃まで石けん事業に関わる多くの文書が残っている。そのうち石けん事業の開始を明確に示す日誌（1873 年），せいらんしあげものひかえちよう精煉仕揚物扣帳（1873 年），石鹸蔵出帳（1873 年），第 1 回内国勸業博覧会出品石鹸絵図面（1877 年），第 2 回内国勸業博覧会出品石鹸飾箱絵図面（1881 年）を化学遺産に認定した。さらに横浜開港資料館は寄託資料以外にも堤石鹸関係資料を収集し，所蔵している。そのうち堤石鹸の商標 18 種とその版木 1 点，堤石鹸木型 2 組を化学遺産に認定した。

資生堂関係資料は掛川の資生堂企業資料館に多数保存されている。その中で，福原衛生歯磨石鹸の初期の容器（1888 年）と処方帖（1924 年），化粧水オイデルミンの初期の大小容器入り製品 2 点（1918 年）（小型は容器のみ）と処方帖（1924 年），養毛美髪剤フローリン初期の製品（1915 年）と処方帖（1924 年）を化学遺産に認定した。

花王石鹸関係資料は東京の花王ミュージアムに保存されている。高級石けんの製造を目指した長瀬富郎は最初に完成した石けんを高峰讓吉が深川釜屋堀に創設した製薬所に分析依頼し，この分析結果を付して花王

石鹸を販売した。1890 年 12 月に高峰讓吉が長瀬富郎に宛てた石けん分析結果の報告書状および製薬所分析掛の名義による正式な分析報告書，初代長瀬富郎から始まり，その後工場長によって書き継がれていった調合帳 5 冊（1903～13 年）を化学遺産に認定した。

ライオン関係資料としては，ライオン(株)が所蔵している石けんの製造開始初期の製造日記（1894 年），歯みがき事業開始初期の獅子印ライオン歯みがき粉（1899 年），英米輸出用桐箱入り歯みがき粉 Banzai（1905 年または翌年）を化学遺産に認定した。



資生堂・福原衛生歯磨石鹸，花王・調合帳，ライオン・製造日記

クラブ洗粉関係資料としては，(株)クラブコスメックスが所蔵しているクラブ洗粉紙袋（1906 年）を化学遺産に認定した。



クラブコスメックス・クラブ洗粉

- 1) 山村博美，化粧の日本史，吉川弘文館，2016。
- 2) 日本化粧品工業連合会，化粧品工業 120 年の歩み，1995。
- 3) 中曽根弓夫，石鹸・合成洗剤の技術発展の系統化調査，国立科学博物館，2008。
- 4) 水尾順一，化粧品のブランド史，中央公論社，1998。
- 5) 平尾太郎，平尾賛平商店 50 年史，平尾賛平商店，1929。
- 6) 横浜開港資料館，横浜ものはじめ考，第 3 版，横浜開港資料館，2010；横浜開港資料館，たまくず，横浜開港資料館，2012。
- 7) 宮本又郎，図説 明治の企業家，河出書房新社，2012。
- 8) 堀江小十郎，日本石鹸沿革誌，堀江小十郎，1908。

なお，参考資料 2)，5) の入手に対し日本粧業会に厚く謝意を表します。

© 2017 The Chemical Society of Japan